

木を植える覚悟

大学時代、親しい友人が集まり、
人類の文明の将来について語り合っていたとき、
物理学を専攻していた友人が、
思索的な表情で、語りました。

物理学のエントロピーの法則によれば、
この宇宙は、無秩序が増大し続け、
いずれは、すべてのものが平衡状態に達し、
「熱死」（ヒート・デス）を迎える。
それでも、人類の文明の将来を語るのか。

すると、その意見に呼応するように、
天文学を専攻していた友人が、語りました。

たしかに、そうかもしれない。
そもそも、この地球という惑星も、何十億年か後には、
赤色巨星となって膨張する太陽に呑み込まれ、
消滅してしまうのだから。

この友人のやりとりを、懐かしく思い出します。

一笑に付せるようでありながら、
どこか、心に虚無感を忍び込ませる
この二人の友人の言葉。

しかし、
それからの年月の中で、
その虚無感の暗闇に、
一つの光を与えてくれる言葉に出会いました。

たとえ明日、世界が終わりになろうとも、
私は、リンゴの木を植える。

マルティン・ルターはこの言葉は、

世界が、どう在るかではなく
自己が、どう在るか

その覚悟の尊さを、教えてくれたのです。